

フォーラム委員会だより

第200回 aaca フォーラム開催報告

「素顔の巨匠たち」

ー長谷川智恵子さんの講演会ー

Atelier K アトリエ・ケイ級建築士事務所
日本建築美術工芸協会会員

柏尾 栄



秋も深まりコロナ禍もやや下火の週末、11月26日（土）に笠間日動美術館において、記念すべき第200回のaacaフォーラムが開催されました。参加者25名、現地集合・現地解散で、多くの方は常磐線特急利用で東京から1時間強、友部駅からの笠間観光周遊バス十数分までのご到着、朝は少し雨に降られましたがランチ時には止んでくれました。

笠間稲荷の近く、笠間城の城山の麓に立地する美術館は、自然溢れる環境の中、芦原太郎氏設計の企画展示館からフランス館の間には、紅葉に囲まれたブリッジの先に清々しい竹林と緑の中の屋外彫刻庭園があり、講演前のしばしの間、フランス館の名品鑑賞とともに心洗われる環境に浸ることができました。ちなみにここは江戸初期、浅野家が赤穂に転封になる前二十数年間治めた城跡だそうで、美術館玄関横には家老大石家の屋敷跡がありました。

講演は、1階にパレットコレクションの展示があるパレット館の最上階で行われました。画家たちに愛用のパレットに少し絵を加えて提供して下さいと集まった370点（当初150点）のパレットが展示されていました、それぞれの画家の魂の集積です。

長谷川智恵子さんの講演は、長谷川家が画廊を開くルーツのお話から始まりました。代々長崎蘭学医だった先祖から、二代前は心の医者と言われる牧師、そしてお父様は「これからは油絵を極めよう」と画廊開業へ。代々共通する思いは、人を癒す志だと感じました。

さて、本題の「素顔の巨匠たち」のお話。長谷川さんはTV番組がきっかけで初めて有名画家ダリやミロへのインタビューを行い、その後、当初不安なところを励まされながら執筆活動に挑戦し、現在の多くの著作が生まれたそうです。

長谷川さんが直にお会いになった昔の画家・巨匠の素顔は、「今の画家は常識人で穏やか過ぎて逆に心配」といわれるのとは対照的に、それぞれとても個性的でした。短い時間のふれあいだけでも振る舞いや話の内容が濃密で、インタビューの執筆は「下手な文章でも書けた」と謙遜されて

います。今回の講演では、その個性的な巨匠の素顔との数多いエピソードの一部を楽しく聞かせていただきました。

その中の一部を断片的になりますが紹介しますと、

ピカソ：20歳のころは普通の絵を描いていたが、奥さんが変わるたび画風が変わっていった。子息クロードによれば、お金の持ち方使い方に無頓着でトランクに現金を入れていた、子供の映画代も桁違いで渡すことがあった。遺族に残された膨大な作品は相続税としてフランス政府に物納され、ピカソ美術館ができた。

ダリ：「今世紀最高の画家は？」の質問に「自分」と答える自負心。撮影もインタビューもすべてやりたいように指示し、プロデューサーそのもの。徹底した女性蔑視に驚いた。食事会での「本物の女性」とR.バートン氏が言う美人も男性だった。ただし妻ガラは別。

ミロ：インタビューはほとんど受けてくれないにもかかわらず会って幸運だった。かわいくニコニコしていてあまりしゃべらない人だが温かく話す。日本びいき、黒が好きで日本の書道が好きと言っていた。

シャガール：南仏で奥さんと共にインタビューできた。OKとるのに2年、日本大使の同行でやっと成功。町であってもわからないような普通の人だった。「私は平凡な絵描き、特別なことは言えない」と話され、予定時間15分きっかりで「あとは妻と話して・・・」とアトリエへ。ユダヤ系ロシア人で、「愛と平和が最も大切」と思い、故郷ヴィテブスクの子供心の思い出やバイオリン弾きやサーカスが作品のモチーフ。「フランスは頭の国だが、日本は魂と心の国」と評価している。何度も「私は平凡な絵描きなだけです」と繰り返された。

梅原龍三郎：晩年、長谷川夫妻で滞在中のパリのホテルを訪問したが、絵はホテルの大部屋で描いており、食事は高級レストランで。健啖家でフランス料理・こってり料理がお好きで、酒はストレートどぼどぼ。長谷川さんにローストビーフを作ってくれたことがあったが、ナポレオン漬



企画展示館の玄関



左：フランス館 右：パレット館



屋外彫刻庭園（見下ろし）



（見上げ）

けだった。長生きをされた。本物・高価なものが好きで一流の有名人と交友。「絵は商品ではない」と気前よく人にあげることもあった。税金払うのはいや、葬式は生きている人に迷惑なので挙げないとも。長谷川さんのポートレートを手で描いてくれた。礼節を大切に、紺のスーツなど着てシックでお洒落な方だった。

その他：奥谷博、鴨井玲の各氏との話もありました。

このように、講演では著名画家に直接に接した方からしか聞くことのできない貴重で興味深い数々のエピソードや人となりについてのお話を聞くことができました。作家の人物を知ると、作品を見る見方が深くなり、変わってくるような気がします。(数々の巨匠のインタビューエピソードは、ぜひ長谷川さんの著書「美」の巨匠たち(講談社)などをご覧ください)

そのあと参加者からの質疑応答を受けていただき、最後のくくりには、

「絵の見方は好きと嫌いでもいい、自分の好きな作家、好きなものを探して気楽に接したらいいです、一つでもいいから好きなものを見つけてください。」との言葉をいただき、大きな拍手で終了しました。

終了後の会場で、著作の笠間日動美術館名作選「思い出の作品たち」(海外編)(日本編)を特別価格で販売いただき、購入者にはサインをいただきました。

講演の後は、町中に出ての1時間ほどのランチタイム。参加のほとんどの皆さんで「ひげのcafé」に入ることができました。いきなり大勢の来客で店主はてんやわんやでしたが、参加者同士の楽しい会話がはずみました。その後美術館に再入場し、周遊バスの出発時刻まで1時間ほど、開館50周年記念企画展「夭折の画家たち」を鑑賞ののち、15時頃無事フォーラムは終了、現地解散、楽しい思い出をのせて観光周遊バスで帰路につきました。

笠間は笠間稲荷を中心に、日動美術館とその分館「春風萬里荘」(魯山人旧居の移築)、芸術の森公園の茨城県陶芸美術館もある、こじんまりとしたいい街です。少し足を延ばせば益子の街、「かさましこ」といわれる笠間・益子は私のように陶芸に興味があるものにはたまらないエリアです。東京から近いので、まだ足をお運びでない方はぜひゆっくり訪れていただきたいと思います。



講演風景



興味深いエピソード



サイン会



参加の皆さんと記念撮影(中央 長谷川さんと東條会長)